

I 学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	西那須野町立三島小学校								
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	3	3	3	3	2	22	33
児童数	127	121	117	112	117	96	5	695	

II 研究の概要

1 研究主題

『楽しい』・『わかる』 算数科指導の在り方 ～個に応じた指導法の工夫～

2 研究の内容と方法

(1) 実施学年・教科

全学年・算数
 (学年が進むにしたがい、興味関心や理解の差が大きくなっている実態があったため)
 (平成4年度から指導方法工夫改善で算数科T・Tの研究を行った成果が生かせるため)

(2) 年次ごとの計画

平成15年度

- テーマ
『楽しい』・『わかる』 算数科指導の在り方 ～個に応じた指導法の工夫～
- 研究の見通し
 - (1) 『確かな学力』を理論分析・体系化し、その体系化に合わせた指導実践を行えば、児童の『生きる力』の「知の側面」として働くこととなるであろう。
 - (2) 『確かな学力』の根幹をなす「学ぶ楽しさ」「分かる喜びを」を重視し、個に応じた指導方法の工夫改善を算数科中心に行っていけば、『確かな学力』は向上していくであろう。
- 研究の内容・方法
 - (1) 『確かな学力』の構造を体系化し、児童の問題点を分析する。
 - (2) 児童の『学ぶ力』を全教育活動で伸ばしていき、定着させる。(学力第Ⅰ層)
 - (3) 算数科を中心に個に応じた指導を展開し、その成果を他教科に反映させる。(学力第Ⅱ層)

学力の構想図

東京学芸大教授児島先生の講演内容から

- ア 個に応じた教材開発の工夫
 - (7) 教材の価値の分析、研究
 - (4) 個々の児童の活動に対応できる補充的、発展的な学習教材の開発
 - (9) 教材利用のタイミングの研究
- イ 1学年または1学級を複数に分けた少人数指導
 - (7) 分割したグループにそれぞれ均一の指導を行う方法
 - (4) 習熟度別に分けて指導を行う方法
 - (9) 分割したグループをさらに少人数化して指導する方法
- ウ 個々の学力に対応する評価の工夫
 - (7) 評価と指導が一体化できるような評価方法の開発
 - (4) レディネステストの分析・形成的評価の充実
- エ 視点児童の設定と継続的指導
 - (7) 算数科における児童の類型化を設定
 - (4) 類型に応じた指導法、学習教材の開発などの具体的支援策の充実
 - (9) 指導結果の分析と累積
- オ 教師一人のできる習熟度別学習
 - (7) T・Tがなくてもできる指導法の研究
 - (4) 効果的体制の研究

(4) 各教科で身につけた力を課題や問題に対しぶつけていく。(学力第Ⅲ層)
 (5) 直接体験を重視し、教育活動に盛り込み、啓発活動で家庭にも協力を得る。(学力基層部)

平成16年度

- テーマ
『楽しい』・『分かる』算数科指導の追究 ～個に応じた指導法の改善～ (仮)
- 研究の見通し
 - (1) 『確かな学力』の体系化に合わせた指導実践をさらに追究していけば、児童の『生きる力』の「知の側面」として、さらに働くこととなるであろう。
 - (2) 『確かな学力』の根幹をなす「学ぶ楽しさ」「分かる喜びを」を重視し、個に応じた指導方法の改善を算数科中心に行っていけば、『確かな学力』は向上していくであろう。
- 研究の内容・方法
 - (1) 児童の『学ぶ力』を全教育活動で更に伸ばしていき、定着させる。(学力第Ⅰ層)
 - (2) 算数科を中心に個に応じた指導を展開し、その成果を他教科に反映させる。(学力第Ⅱ層)
- ア 個に応じた教材開発の追究
 - (ア) 教材の価値の分析、研究 (昨年度の実践をもとに)
 - (イ) 個々の児童の活動に対応できる補充的、発展的な学習教材の開発、集積
 - (ウ) 教材利用のタイミングの研究
- イ 1学年または1学級を複数に分けた少人数指導
 - (ア) 分割したグループにそれぞれ均一の指導を行う方法
 - (イ) 習熟度別に分けて指導を行う方法
 - (ウ) 分割したグループをさらに少人数化して指導する方法
 - (エ) 初年度の実践をふまえた効果的な単元の絞り込み
- ウ 個々の学力に対応する評価の工夫
 - (ア) 評価と指導が一体化できるような評価方法の継続研究
 - (イ) レディネステストの分析・形成的評価のさらなる充実
- エ 視点児童の設定と継続的指導
 - (ア) 類型に応じた指導法、学習教材の開発などの具体的支援策の累積
 - (イ) 累積からの指導事例集の作成
- オ 教師一人のできる習熟度別学習
 - (ア) T・Tがなくてもできる指導法の実践研究
 - (イ) 効果的体制の実践研究
- (4) 各教科で身につけた力を課題や問題に対しぶつけていく。(学力第Ⅲ層)
- (5) 直接体験を重視し、教育活動に盛り込み、啓発活動で家庭にも協力を得る。(学力の基層)

(3) 研究推進体制

全体会	
推進委員会(校長, 教頭, 教務, 研究主任, T・T主任, 学年主任)	
奇数学年研究部	偶数学年研究部
<input type="checkbox"/> 企画・調査啓発 <input type="checkbox"/> 授業研究 <input type="checkbox"/> 教材開発・評価研究	<input type="checkbox"/> 企画・調査啓発 <input type="checkbox"/> 授業研究 <input type="checkbox"/> 教材開発・評価研究
部員名	部員名

III 平成15年度の研究成果及び今後の課題

1 研究成果

- (1) 発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材開発において
 - ア 各学年とも教材資料が蓄積されてきている。
 - イ 教材の中に、共通課題を設定したことで、ねらいが焦点化できた。
 - ウ これまでの研究授業では、個に応じる教材が集約的に開発できた。
- (2) 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫において
 - ア 各学年の継続的な実践の積み重ねが行えた。
 - イ 少人数指導による個に応じる指導が行え、児童一人一人が課題意識をもって学習に取り組めるようになってきた。
- (3) 児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善において
 - ア 指導体制の工夫で児童一人一人に目が行き届くようになった。
 - イ まだまだ個人差はあるが、児童の自己評価力が向上されてきている。
 - ウ 教師間で指導と評価の協同作業を続け、共通理解が図れてきた。
- (4) その他の取組において
 - ア 学力のとらえが整理され、指導に生かせる準備が整った。
 - イ 他校の研究会に参加し、研究実践上の工夫を数多く学ぶことができた。
 - ウ 少しずつではあるが、保護者から研究に対する理解が得られてきている。

2 今後の課題

- (1) 発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材開発において
 - ア 発展的な学習を使った際の評価処理の仕方をさらに明確にする。
 - イ 児童一人一人の学習状況をとらえ、その学習スタイルに合わせた教材も開発する必要がある。
 - ウ 指導に活用した教材資料の修正と次年度に向けた整備が必要である。
- (2) 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫において
 - ア 習熟度別学習において発生する『各コース』の進度差への対応法
 - イ 指導過程における指導形態の修正と変更
 - ウ 次年度に向けた反省点の洗い出しと実践内容の領域別整理
 - エ 教員の指導力のさらなる向上をねらった研修会などの計画
- (3) 児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善において
 - ア レディネステストの内容と系統性を考慮した問題作成を検討する必要がある。
 - イ レディネステスト、プレテスト実施を年計上に時数化する必要がある。
 - ウ 児童自らがコースを選択する際、望ましいコース分けがなかなか実現しない。
 - エ 関心・意欲・態度や数学的思考の観点を評価する際の具体的な規準が曖昧である。
 - オ T・T教員と担任とのさらなる役割分担を明確にする必要がある。
- (4) その他の取組において
 - ア 『確かな学力』定着のための基底的な指導がまだまだ軌道に乗っていない。
 - イ 保護者への啓発は定期的に行っていく必要がある。(例：フロンティア使りの発行など)
 - ウ 『確かな学力』の定着を診断する、客観的な資料の作成や分析について研究していきたい。
 - エ 研究が効果的に行うことのできる研究組織を整備する必要がある。

IV 学力等把握のための学校としての取組

定期的な学力調査の実施

- ・学年初めに、教研式学力テスト（5学年）
- ・学年末に、目標規準準拠テスト（全学年）

V フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- ・平成15年7月：町学習指導主任研修会で少人数指導の工夫と取組みについて発表
- ・平成16年4月：町教育振興会において実績発表を行う予定

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T、Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無